

「日本の文化Ⅱ」ティーチングポートフォリオ

佐賀女子短期大学 地域みらい学科 藪 敏晴

1. 教育の責任

授業者の専門分野は日本文学(特に、神話・説話・物語等の古典散文)で、そこから派生して現在は、日本文学・日本文化・神話関連科目、また、日本人・留学生双方を対象とする日本語表現、アカデミック・スキル、就職関連科目等を担当している。本科目は、授業者が担当する科目のうち、日本文化の科目で、韓国語文化・グローバル共生ITコースで語学・司書分野を学ぶ学生を対象として実施するものである。

この科目は、本コースの教育目標である「多文化共生力、専門的知識・技能(外国語力、ビジネス能力、司書としての技能、ITとデザインに関わる専門的知識・技能)を国際・地域社会で主体的に活用できる人」を育成すること、の中で、特に「多文化共生力」の育成に関連している。

また、学習成果の評価項目としては、特に⑥の「多文化共生社会に対する基礎的な知識が身についている」の部分に強く関連し、受講生各自が担当するスライド資料の作成と発表や、他の受講生の発表に対する評価・コメントカードの作成、期末レポートを通して、②の「授業や行事等に積極的にに関わり、自主的に学習していく姿勢・態度を身に付けている」とも関連している。

2. 教育の実施における理念

シラバス記載の到達目標は以下の通りである。

- ①日本の年中行事について理解し、基本的事項について説明できる

語学を学ぶ学生や司書資格取得を希望する学生に向けて、日本人の生活に密着した年中行事と食文化について、外国人や図書館来訪者にその概要を説明できるようにすることを目的として、日本の年中行事(藪)と食文化(久保)について、受講生の発表を基に講義を行っている。

展開時期は1年次後期である。対象とするのは語学・司書を学ぶ学生であるが、特に韓国語文化コースの受

講生が留学直前の学期に受講する科目であることから、「多文化共生の視点」を獲得するための基礎的知識としての「自国文化の理解」という位置づけで授業を行なっている。

具体的には、現代日本で一般的に行われている年中行事の基盤に、日本古来の信仰および奈良・平安時代に中国から舶載された文化や信仰があること、それらが時間の経過とともに変容し、特に江戸時代に商業化して近代以降に商業化がさらに進んだこと、等について理解することを目指している。

同時に、パワーポイント資料を作成し、それに基づいて発表することを通じて、資料作成及びプレゼンテーションの技術を身につけることを目指している。

また、受講生数によっては、クリスマスやハロウィン、メーデーなど、近現代に欧米からもたらされた行事についても対象とし、それらの欧米での原型とその舶載の事情、日本における変容について理解することを併せて目指している。

例年、本科目を受講する学生は、講義の内容への興味関心のある程度以上有しているようである。受講態度・意欲も良好、かつ高い。留学を前提とした語学学習者、司書資格取得希望者いずれについても一定程度以上の教育効果が上がっていると感じている。

3. 教育の方法

本科目は久保准教授と藪が合同で担当する科目で、最初のオリエンテーションと最後のまとめを両名が合同で行ない、食文化については5コマを久保准教授が、また、年中行事については8コマを藪が担当している。

藪担当部分では毎時間、お正月、ひな祭り、子供の日など、自ら選択した日本の年中行事について受講生が発表し、その後、藪が補足説明を行なっている。

具体的には、対象とする年中行事を受講生の人数に合わせて藪が選択・設定し、オリエンテーションでその内容を説明した後に受講生の希望調査を行ない、希

望の重複などを調整した上で担当行事と発表日程を決定、計画に沿って発表・質疑応答・補足説明を実施している。なお、留学生については、日本の行事の比較対象とすることを念頭に置き、母国の正月や特徴的な行事について発表してもらうこととしている。

本科目は、受講生の発表を中心に、それに対して質疑応答を行なった後に、担当者が補足説明を行なう形で実施しているため、アクティブラーニングとしての受講生の主体性、および授業の双方向性は十分に担保されている。また、同級生の発表中心の授業ということもあって学生の受講態度は例年良好だが、より主体的に授業に参加できるよう、当年度からは発表者以外の受講生全員に、発表に対する評価・コメントカードを記載させることとした。

4. 教育の成果

<成績評価から>

本科目の担当教員による評価は、発表内容に加え、「この授業で学んだこと、身についたこと」について記した期末レポートによって行なっている。

○教員の到達度評価(2021 年度藪担当分のみ)

秀 13 名・優 8 名・良 1 名・可 0 名・不可 1 名

○学生による到達度評価(授業アンケートの評価結果)

2024 年度 4.25

○学生の満足度(授業アンケートの評価結果)

2024 年度 4.27

<授業評価のアンケートから>

- ・久保先生も藪先生も、自分たちに積極的に調べさせるための工夫がなされています。
- ・日本の行事や昔の食事などを知ることが出来て、楽しかったです。
- ・日本人なのに日本の文化を知らないことが多く、日本のことを知れる良い授業だったと思います。

<相互評価から>

自己評価として、以下のコメントを出した。

- ・同級生の発表が中心であることから、学生の受講態度は例年良好で、今年度も同様である。生活が都市化している現代社会において、年中行事の意味や起源についての理解は驚くほど低く、学生は好奇心を持って授業に取り組んでくれていると感じ

ている。

また、相互評価の観点として、以下 3 点を要請した。

①学生の発表の内容はどうか、また、それに対する教員の補足説明は十分か、②発表者以外の受講生は主体的に参加しているか、③授業の双方向性は十分に確保されているか」

ピアレビューとしては、以下の意見をもらった。

- ・学生たちは各人の関心に基づき、パワーポイントの資料を準備して堂々と発表していた。年間を通して計画的に授業をされてきた成果だと思われる。学生たちのプレゼン力、表現力の向上が期待できる授業であった。発表者以外は熱心にメモを取っており、聴く力の向上に資するものと思われる。先生の質問に対しても発話をしており、学生たちの今後の成長を期待したい

- ・学生のプレゼンはよく鍛えられている。学生の発表を受けて担当者が補足説明を行なっているが、その説明によって学生の発表が面白く深められている成績と授業アンケートの数値からは、不可となった 2 名の学生を除けば、おおむね授業運営はうまくいっているものと思われる。「学生による到達度評価」が若干低めに出ているが、1 を付けた学生が 1 名(これを除くと 4.0)おり、教室に来ることのできなかった学生によるものと想定される。

また、上記の学生のコメントや相互評価のピアレビューを見ると、「日本の年中行事の理解」および「資料作成及びプレゼンテーションの技術を身につける」という到達目標は一定程度達成されていると感じている。

5. 目標

授業内容については、今のところ、大きく改善すべき課題は見当たらない。

ただし、今年度は不可の学生が 2 名出た。いずれも日ごろから不登校気味の学生で、授業開始当初より教室に来ることができなかった。発表を中心とする授業である以上、ある程度やむを得ない部分はあると思うが、どのような声掛けをすればドロップアウトさせずにすむか、より一層真剣に工夫する必要を強く感じている。